
子供読書感想文コンクール!入賞できる？

かみなせ しゅら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子供読書感想文コンクール！入賞できる？

【Nコード】

N4635BA

【作者名】

かみなせ しゅら

【あらすじ】

どくしょかんそうぶんのひ

『大人のための残酷童話を読んで』

かみなせ しゅら

僕は倉橋由美子さんの「大人のための残酷童話」を読みました。簡潔に言えば童話のパロディの短編集です。大人のための、と書いてあったけれども、僕はもうすぐで大人なのだから関係ない。それに大人なんて何も変わらないさ、と考えて夜中の1時頃から読み始めました。しかしそれは間違いであつたのです、三つとも。

初めの方の短編は、童話特有の滑らかさを失わずに普遍性を打ち壊していく刺激を童話に含めたお話、と言う印象でした。僕は、単純にこの人の視点は奇異で、それから、面白いな、と思い始めただけだったので、短編の先へ進むに連れて、そんな僕の油断を見透かしたように、作者の倉橋さんは様々なバッドエンドと共に苦いものを僕の喉に押し込みました。その一短編を読み終えてまさに僕は「喉が苦い」と口元に呟いたものでした。しかし未だそれは一種の余裕を孕んだ苦みであつて、例えば今までついぞ見たことのない程の極めて困難な問題を前にした古参の科学者が、そのために費やす莫大な時間を想像してうんざりした気持ちを持つとともに抱く、自分が問われているのではなく、あくまでも自分は、自分が、対象を見いだしにいく「解決者」なのだ、という様な余裕、が、まだ僕にはありませんでした。

しかし中盤に差し掛かる辺り、なんとなく頭が痛くなってきました。そして二つの間違いにも気付き始めました、とりわけ、3時には閉口を禁じ得ず。暖房を消したので寒くもなってきたようでした。僕は布団を被りました。この頭痛の訳を説明しましょう。

ところで、この本は童話を源にして書かれているので、その特色として良心的に空想的で、ファンタジーとして読むものであり、神話や童話として長い時の人為がぶつかり合って擦れ合って、丸く滑らかに、そして逆説的に生み出された、無為のファンタジアの性質を持つのに対して、同時に、この本では作者がそれらの物語に人為としての解釈をすることから始まり、新たな思想を持った言葉として紡がれる、しかし今度は言わば童話と神話の完全性からそれは離れていくことになるという性質も持ちます。

するとこの相反する二要素は互いに干渉し合って、中央のある一点に収束しようと企み合うのです。その収束は決して円滑なものではなく、震えを伴って何故かその場所は思想の茂みに隠れて暗い。その茂みの暗がりの鬱陶しさを先に話した科学者の例で言えば、僕が「解決者」なのか、それとも問われているのが僕なのか、美妙にわからなくなる場所でした。それは、まだ余裕があつた苦い喉の奥から、苦味を放出するそのいかがいしい生命体が首の中を這っていつて、頭蓋骨の天辺を覆う頭皮の裏側にべたとへばり付いた感覚でした。彷徨う震えは一層激しく細くなり、午前4時には僕の神話の赤蛇と現実の青蛇とが重なって世界に渦を巻いている映像が浮かび上がります。そう。この物語は読み手がこの赤蛇と青蛇に締め付けられて窒息していく過程を描いているかのようでした。こうして短編の進行に沿ってそれがあたかも一つの物語であるかのようクライマックスを迎え僕の頭痛も最高潮に達するのです。

この頭痛は或いは全てのバッドエンドにも起因するのかもしれないが、単純に物語の筋というのでは無しに、神話・童話と人為の狭間を鋭敏に往き来するその様に原因の多くは有ったように思います。

これは読書感想文と言われるものですから、これから読む人のため、内容に直接言及するのは止めておきましょう。

気がつくと午前5時。物語を読み終えて時計を見ました。それから次のページをめくると、恐ろしいことに、作者後書きというもの

がありました。僕には作者後書きというものが信じられず、とても恐ろしいものに思いながら読み始めました。

果たして！響きます。後書きも、解説も、酷く恐ろしいものでした。二人とも冬の夜中の石膏に触るように冷たく、その茂みに青蛇と赤蛇に巻き付かれて動けなくなっている僕を横目で見てから、助けようともせずに、向こう側へ行ってしまうました。頼みの綱だった人たちに置いてかれた。頼みの綱だったのに。

それから紫と緑の世界を離れて余裕が生まれてから、大人というのはこういうものか、と思つて、僕はその事実に冷たい感慨を覚ええました。それは今のところ自分とはつきりと異なる存在でした。

夜は寒く、枕を抱えても、寒く、頭が痛く、ちょうど5時30分、大人が一階で目覚める音がしました。仕方なく僕は7錠を飲み下しました。近頃は4錠で涙目が出てきます。涙目でもう3錠を飲み下しました。ファンタジアのラッキーセブンです。大人の人なら「なな」と聞いただけで「ラッキー」と言うでしょう。それが僕は一番怖いのかもしれせん。

（後書き）

僕はこの本を読んで、大人ではなく、「大人の」という言葉に大層興味を抱きました。

昔このような働きかけられた感覚を抱いた本に、アルベルト・カミュの「シーシュポスの神話」というのがありました。この本とは逆に、その本の思考する方向と自らの歩みの驚異的な同意に熱を出したのです。冬の放課後の小さな空き教室でした。僕と、知らない生徒があと二人、彼らは肘を突いて静かに勉強をして、灯油ストーブがついていました。僕はドン・キホーテが出てきたところで頭痛が堪らなくなつて体も火照つた感覚で、どうしようもなく帰路につきました。冬の、寒い夜でした。案の定、それから二日僕は寝込むことになりました。

しばらくして、また、その本を手取るのですが、しかしその時の熱、は二度と蘇つてはきません。恐らくは、この作品も然りでしょう。その時感じ取れる感覚はその時の身体とシチュエーションとに強く神秘的に、依存するのです。

ところで、笑わないでください。

一階で料理をする音がします。そう言えば弁当の量が多いと文句を言おうと思ったのに。忘れてた。それから僕はファンタジアのために寝たふりをしましょう。あ、もう6時。あと1時間、僕は眠れるだろうか、夢を見るだろうか。

6時10分、携帯のアラームがけたたましく3分ごとに鳴るから電池を抜く！でも眠れない。頭いたい。こんなに頑張ったから入賞できるかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4635ba/>

子供読書感想文コンクール!入賞できる？

2012年1月12日18時50分発行